

相談支援つうしん

<第75号>2021年10月21日
県立湘南養護学校 支援連携部
相談支援係 ~教師編~

～愛着に課題を抱える子どもたちへの支援～

子どもの発達支援を行う際に避けて通れない大きな課題の1つに、愛着関係の形成が挙げられます。愛着とは、発達心理学者のボウルビィが提唱した概念で、「特定の人に対する情緒的な絆」のことです。この絆は人と安定した関係を築いたり社会での適応的な生活を送ったりする力の基礎になります。逆に言えば、愛着に課題を抱えると、対人関係や社会生活で下記のような課題を抱えやすくなります。

愛着障害を抱える子どもの支援は時間もかかる上に、労力もたくさん必要になります。とりわけ思春期以降での対応は、目に見える成果を感じにくかったり、徒労感を感じてしまいやすくなったりします。今回は2つの事例を紹介しながら、それぞれの場合においてどのような支援が望ましいか考えていきます。

＜愛着に課題があるとみられやすい言動＞

- ・誰彼構わずなれなれしく、適切な距離が取れない。
- ・素直に甘えられず警戒心が強い。
- ・集団のルールを逸脱した激しい言動が見られる。
- ・特定の人にしがみつきはなれようとしない。など。

ただし、これらの言動がある＝愛着障害というわけではないので十分に注意してください！

★事例1：「支援をやってもらっても積みあがらない。いつも裏切られてしまう。」

巡回相談で、ある先生からのSOSで対応したときの事例です。子どもにいつも親身になって指導に腐心されていた先生からの依頼で、やっと気持ちが通じ合っただけで子どもが約束を守れるようになってきたと思った頃に、いつも嘘をつかれたり約束を破られたりしてとても傷ついていました。今度こそは大丈夫と生徒を信じたにも関わらず、その気持ちが繰り返し裏切られることで疲弊してしまい、もうどうしてよいか分からない気持ちになってしまったとのことでした。実際に、熱心な先生ほどこのような気持ちになってしまうことが多いのではないかと思います。

◎心の距離はほどほどに。そして、みんなで大変さを分かち合いましょう。

熱心であることや思いやりをもって子どもに接することは大前提です。しかし、愛着障害を抱える子どもへの支援は時間がかかります。マラソンをずっと全速力で走ることができないのと同じで、自分の心の持久力を考えて接することが重要です。そして、一人でゴールを目指すのではなく、仲間たちとペースを相談しながら支援を続けます。焦りや心細さを感じることは支援を行う上ではマイナスですので、励まし合いという心の給水を心がけてください。

◎「先生のおかげでできたよ!」と感じさせる仕掛けを作ってから褒める

いくら褒めても思いが届かず、私自身まるでざるで水をすくうような不毛な作業をしている気持ちになったことがあります。ただ褒めるだけでは関係すら築けないこともあります。愛着に課題のない子どもの場合、褒めることで自己肯定感を高めたり自信をもって意欲的に物事に取り組む力を育んだりできます。こうした子どもたちは、達成したときに「みんなのおかげです。」といった気持ちを言葉にできます。しかし、愛着に課題を抱えていると人とのつながりが薄いいため、単に褒めるだけでは「俺はすごいんだ。」と自己高揚感が高まるだけだったり、逆に「だから何?あんたに関係ないじゃん!」と冷めきった目をし

たりして、気持ちを共有しにくいです。

そのため、愛着障害を抱える子どもには褒め方にひと工夫として、「一緒にやってみよう。」と誘ってできそうな課題を提示し、子どもができたならそれを褒めるという仕掛けをします。また、「こういう風にやってみよう。上手くていいよ。」と予めできそうな課題を設定して投げかけ、できたら褒めます。そうすると、「先生の言ったとおりにやったらできた」という気持ちになります。すなわち、「**先生と一緒にやったらできた**」とか、「**先生の言うとおりにやったらできた**」といった**先生のおかげ感！**を感じられるような先手を打っておくことが重要です。そうすると先生とのつながりを感じやすくなり、信頼関係、言い換えると愛着関係を築くことにつながっていきます。例えばあまりよくないと思いますが、最初のうちだけはよく当たる占い師のような存在になって、頼りにされるとよいのかもしれませんが（いずれは巣立っていくことを忘れてはいけません）。

一方で、叱ったり罰を与えたりすることは、ルールを教えるためには必要な関わりですが、それによって愛着関係を築くことはできず、厳しく接する人の前ではよい子として振る舞うことになります。

褒める機会を設定することは、PECSと同じです。偶然の機会だけでは少ないので、先生とのつながりを感じられる状況を意図的にたくさん設定して褒めることで、**気持ちの共有に成功する体験**を積み、愛着形成を図るのです。



★事例 2：どうせあいつも俺のことを捨てるんだ！

愛着に課題を抱える子どもからよく聞く言葉ですが、とても悲しい気持ちになります。せっかく愛着関係を築けても教員には異動がつきものなので、子どもとの別れがあります。それによって見捨てられたという思いを積み重ねることは人を信じられない気持ちを強化するので、キーパーソンとなる先生と築いた愛着関係は、上手に次のキーパーソン役へと引き継いでいきます。

◎子ども立ち会いのもと引き継ぎをする

年度が改まったら、旧担任（キーパーソン）と新担任と子どもの3人で、「**今日からは新しい担任の先生にお世話になろうね。**」と顔を合わせて引き継ぎを行います。この儀式を経ることで、新しい愛着関係を広げてさらなる成長のよい機会となります。



◎約束や行動パターンを明確にしておき、子どもの前で確認しながら引き継ぐ

そして、「(旧担任)先生とは、授業中出ていくときは**“休憩に行きます”**と言ってから出るようになったよね。新しい先生とも同じようやっていこうね。」といった**約束**や、「**イライラすると物を蹴ってしまいやすいけど、保健室に行けば10分くらいで気持ちを落ち着けられるようになったよね。保健室に行くようにしましょうね。**」といった**行動パターン**と**対応**を子どもの目の前で引き継ぎます。そうすることで切れ目のない連携となります。



今回ご紹介した取り組みはほんの一部です。愛着の課題のみならず、知的な遅れや発達障害といった事情が加わるほどに、もっとたくさんやらなければならないことが出てきます。これをきっかけに参考文献をあたって、さらに理解を深めていただければと思います。

<参考文献>

米澤好史 2015 『愛情の器』モデルに基づく愛着修復プログラム」福村出版